

## One Point Technology

The Importance of Patient's Satisfaction During Trial Wax Denture

### 試適時に患者の満足が得られるような 蠟義歯製作のための一考察

Tomaz Gomes\*

Matsuyoshi Mori\*\*

Gerson de Arruda Corrêa\*\*\*

Tetsuo Saito\*\*\*\*

\*Dental Technician

Address: Rua das Margaridas,

3310 CEP: 007533-80, Taboão da Serra São Paulo, Brasil

\*\*Assistant Professor, Department Fixed Prosthesis,

Dental School, São Paulo University

\*\*\*Associate Professor, Department Complete Denture,

Dental School, São Paulo University

\*\*\*\*Professor, Department Fixed Prosthesis,

Dental School, São Paulo University

Address: Faculdade de Odontologia da Universidade de

São Paulo-Av. Prof. Lineu Prestes, 2227-Cidade Universitária

"Armando de Salles Oliveira"-CEP. 05508, São Paulo-Brasil

#### はじめに

総義歯の製作過程に、蠟義歯試適が行なわれるが、このときに患者から完成義歯に対して、歯肉の色などの審美性を問われることがしばしばある。試適を行なう歯科医師にも、この時点では人工歯の排列や形態などの確認ができて、歯肉に対するステイニングの予測はつかないものである。

試適の段階で、人工歯の排列状況や歯肉形成、辺縁形態、歯肉溝と齦頰移行部をワックスにて修正を加えるべきである<sup>6,10</sup>。しかし、歯肉色

の確認も患者は望んでいるのである。

Goldstein<sup>7</sup>は、「人工的に見えないこと」を総義歯の目的としているが、歯科医師にとって、総義歯に不満をもっている患者とどうコミュニケーションをとっていくかが、最大の難関となる<sup>7</sup>。患者にとって総義歯を装着するということは、機能的、生物学的なものだけでなく、社会的な回復や、心理的な回復が望まれるものでなくてはならない。

患者が総義歯を満足だと感じる要素の中で、審美性に関するものが大きな割合を占める場合もある。そこで臨床造形学、芸術(センス)などの経験を生かし、結果的に機能と審美性を達成できるようにすることが大切である。

よく患者から「先生、この歯肉は赤すぎませんか」と言われることがあると思われる。この一言の中に、患者の審美に対する切望と心配がうかがえる。そのためにも、試適の段階で、患者の要求を満たすことのできるような蠟義歯が必要となってくる。

そこで本稿では、試適の段階で患者に満足してもらえるような蠟義歯製作法を紹介する。



図1 ワックスの8色調の組み合わせで、歯肉形成のワックスアップは完成義歯と同様な色調となる。



図 5 a 上顎総義歯の蠟義歯試通。



図 5 b 重合後の上顎総義歯 (Dr. ダリオ・アドルフィ提供)。



図 6 a 蠟義歯による上下顎総義歯の試通。



図 6 b 完成した上下顎総義歯。歯科医師により若干の調整が行なわれた。

この時点で患者が蠟義歯の色調に対し、何ら不満や問題がないようならば、完成義歯は蠟義歯と同じような色になるわけであるので、審美的な面に関しては、問題は発生しないと思われる。

## 2. 臨床例

蠟義歯試通については、心理的な面でのデータがないので、歯科医師と患者との会話が大切になってくる<sup>9)</sup>。

患者の歯肉特性を表現した蠟義歯と、完成したレジン床義歯を示す(図 3-6)。

図からもわかるとおり、蠟義歯とレジン床義歯のあいだにさほど色調差は見られず、良好な結果となっている。

従来までは、蠟義歯と完成義歯の歯肉色の違

いを明確に表現することができなかったため、患者にとっては中身の無い説明となっていた。しかし、試通段階で調整することにより、完成義歯に対して期待をもたせることができ、患者が義歯装着を心待ちにするような作用をもたらすことができる。

## おわりに

顔貌のなかでは目と口もとで表情を表わしており、口腔領域を専門とする歯科に対して、審美的要求が高まってくるのも当然である。

このような問題のなかで、患者に審美的に満足してもらうためには、完成義歯の審美形態を蠟義歯試通の段階で再現しておくことがこれからの歯科治療に必要となってくるであろう。

## 参考文献

1. Berge, E. : 2-year follow up of patient satisfaction with new complete dentures. J. Dent., 16 (4), 160-165, 1988.
2. Frush, J.P., Fisher, R. D. : Dentogenic, its practical applications. J. Prosthet Dent., 9 (6) : 914-921, 1956.
3. Goldstein, R.E. : Estetica em Odontologia. Rio de Janeiro : Guanabara Koogan, 1980.
4. Gomes, T., Adolfi, D., Mori, M., Correa, G. A., Braunwarth, J. : Zahnfleischcharakterisierung von Totalprothesen mittels Kunststoff-Farb-Skala nach Tomaz Gomes. Die Quintessenz der Zahnmedizin, 20 (6) : 665-674, 1994.
5. Murrel, G.A. : Complete Denture eshetics. Dent. Clin. N.Amer., 33 (2), 145-155, Apr. 1989.
6. Renner, R.P. : Complete Denture-A guide for patient treatment Masson Publishing, U.S.A., Inc. 87-119, 1981.
7. Saizer, P. : Protesis a placa. Progentol, Buenos Aires, 501-507, 1980.
8. Sharry, J.J. : Complete Denture Prosthodontics, McGraw-Hill Book Company, Inc., N.Y., 236-243, 1962.
9. Van Waas, M.A. : The influence of psychology factors on patient satisfaction with complete dentures. J. Prosthet. Dent. 63 (5) : 545-548, May, 1980.
10. Wright, S. : Prosthetic reproduction of gingival pigmentation. Br. Dent. J. 136 : 367, 1974.

## 解 説

わが国でも、超高齢化社会が進み、無歯顎患者の比率が増加傾向にあり、患者からのニーズも高度に、多岐に渡っている。

すでに失われた口腔内臓器の回復は、機能・審美はもとより、心身ともに幸福に導くことを目的とするものである。高齢化社会に、無歯顎患者の口腔介護を考えた、生命力のある人工臓器としてのデンチャーが近年求められている。

アメリカ、ヨーロッパでも、最近盛んに各年齢層や性別に調和した歯肉形態やキャラクターライズを施したレジン床の積層テクニック、ティンティングが施されるようになってきている。

Tomaz Gomes 氏の論文は、本誌'95年6月号において「レジン床色調スケールを用いる総義歯床の個性化」が紹介されているが、今回の論文は、総義歯臨床で重要なポイントになってくるものと思われる。患者が総義歯に対して機能的、審美的、心理学的など、さまざまなものを求めるなかで、總義歯の口腔内試適時に完成義歯へのイメージをわかせる、それが結果的に心理的に患者の満足が得られることに意義があると思われる。

本テクニックを可及的生理に調和させるためには、失われた臓器を組織解剖学から回復することが重要となる。このようにして回復された形態が、周囲筋肉群とデンチャーが有機的で、しかも生体適合性があり、生体機能性と生体審美性を求めた、いわゆる二義的人工臓器 (Better Function) とな

り、全身への学際的総合科学となりうる義歯で、より美しい顔貌を作るための考慮すべきポイントと考える。今後は技工指示書から技工処方箋への変革が望まれる。

本稿で紹介されたテクニックは、カラーワックスを用いての患者個々の変化に対してワックスキットにより、よりリアルにすることである。このような場合、ともすると“それだけ”が先行してしまう恐れがあり、“木を見て森を見ず”的になりやすいが、このテクニックの裏に隠された全身との関係、いわゆる咬合位の問題、咬合平面、排列位置、咬合関係、床の形態、顔貌との調和、周囲筋肉群と義歯の調和、機能観、審美観、適合観などについても同時に考察して見るのが大切であると思う。

このようなシステムにより、模型上のみで仕上げるのではなく、より口腔内にマッチしたものを作ることにより、患者との密接なコミュニケーションを得ることができ、今まで日常臨床において得られにくかった情報が求められる。レジン床義歯へのデンチャーカラーリングチャート ティンティングに有効な解決策の一方法と思われる。今後も著者らの個性的臓器デンチャーの研究を心待ちにしたい。

佐藤補綴研究室

（オッセオインテグレートッドインプラントラボ室）

佐藤幸司



図2 a ワックスキットを応用して製作した上下顎総義歯試適。



図2 b 総義歯作製に使用した歯肉色シェードガイド(上側)との比較。



図3 a 総義歯による上顎部分床義歯の試適。



図3 b 完成した上顎部分床義歯(Dr. ダリオ・アドルフ提供)。



図4 a 上顎総義歯と下顎部分床義歯の総義歯試適と、製作に使用した歯肉色シェードガイドとの色比較。



図4 b 完成した上顎総義歯と下顎部分床義歯。人工歯にも特徴付けがなされている(Dr. イソ・ザニ提供)。

### 1. 材料と方法

①パラフィン、生ワックス、カルナウパワックス、セレスナなど8色のワックスキットを用意する(図1)。

②歯肉形成と同時に歯肉の色調を歯科医師が

歯科技工士が選択し、歯肉レジン用シェードガイドと照らし合わせながらワックスによる歯肉形成を行なう(QDT'95年6月号参照)。試適時に、このとき使用したワックスキットを使用すれば、修正も簡単である。